



# 天女が 笑う



川崎ゆきお

「来年のことを言うと鬼が笑うと言うが、何処にいるんだろうねえ」

師走、忙しいときに、のんきなことを言っている。特に用事がないのだろう。

「鬼ですか」

「何処に所属している鬼だろうか」

「それよりも、来年のことを考えていたのですか」

「ああ、新年が来るなあ、年を越すなあとね」

「来年の計画とか？」

「ない」

「あ、はい」

「年末年始も静かなものだ。これが不気味でねえ。まあ、以前は師走は忙しく、押し迫ってからが大変だったが、もう今はそれもないので楽なんだが、この静けさが妙なんだよ」

「正月の準備とかは」

「しなくてもいい。隠居なのでな」

「はい」

「この静かさが鬼かも知れん」

「はあ」

「最近の年越しが怖いのは、そのためなんだ」

「鬼が出るのですか」

「鬼かどうかは分からんが、鬼が静かに見ているようなね。視線がね、あるんだ。忙しい頃はそんなこと、思いもしなかったんだが、この静けさが危ない」

「でも、いいじゃないですか、静かに年の瀬を迎え、静かに新年を迎える。これが本当はいいんじゃないのですか」

「そうなんだが、何もないのが怖い」

「怖いと言えば鬼ですか」

「見たことはないがね」

「静かな年末年始に出る鬼かも知れませんよ」

「盆には鬼は出ん」

「どうしてですか」

「地獄の鬼も、閻魔さんも盆は休みなのでな」

「はあ、そうなんですか」

「しかし、年末年始は鬼はどうしているかだ。地獄も営業中かも知れん」

「じゃ、閻魔堂へお参りに行かれてはどうですか。鬼もいるかも知れませんよ。そこで確認するとか」

「冗談が通じる人だねえ」

「いえいえ」

「しかし、この近くに閻魔堂はあるかねえ」

「隣町のはずれにあります」

「そうか」

「まだ農家なんかが残っています。そこにお堂があって、閻魔堂と書かれてました」

「ほう、詳しいねえ」

「神社とはまた違うんです」

「閻魔さんだからお寺系だろ」

「はいはい、そうです。閻魔さんの像がありました」

「鬼は」

「閻魔さんの眷属だと思いますから、周りにいるかと」

「見たか」

「え、鬼ですか」

「いや、その閻魔堂に鬼の像とかを」

「それは見ていませんが」

「極楽へ行けばいいんだ。それなら鬼は出ない」

「はい」

「来年のことを言うと笑う鬼は地獄の鬼だ。来年は私の世話になるだろうってね」

「はい」

「だから、極楽へ行けばいいんだ。すると、天女が笑うとなる」

「天女の世話になるのなら、良いですねえ」

「しかし、来年であっち側へ渡ってしまうんだから」

「まあ、どうせ渡るわけですし」

「天命を全うしたなら、不幸じゃないけどね」

「はい」

「しかしこれは老衰だろう」

「命を使い切ったわけですね」

「事故でなくなっても、まあ、それも天命だろうがね」

「じゃ、善行を積んで極楽へ生きましょう」

「来年のことを言うと天女が笑う。これだな」

「はい、お大事に」

了